二、宣撫とは何ぞ

蘆溝橋の銃聲に端を發し、幾多同胞の血潮を以て彩られた新しい東亞の曙が華北の東北隅から徐々にその輝かしい光を放ち初める。昭和十二年八月の上旬、一行五十三名より成る武器なき戰士が決死の色を浮べて秘に山海關を越えた。之こそ現在總員二千餘名、班を分つこと百數十班に垂んとする北支宣撫班の草分けを承つた先驅者の一團であつた。

爾來、ひたむきな皇軍の進擊により城壁の上に、車站の棟に一本亦一本日章旗が其の數を加へて行くに應じて宣撫班も班の數を加へ、蒙疆地區の宣撫班が十三年十二月を以て一先づピリオットを打ち、中支宣撫班も亦十三年六月を以て一應うち切りとなつた今日にあつても、北支宣撫班のみは今猶每次班員を加へ、津浦、京山、京漢、正太、同蒲、隴海の各線に强靱な蜘蛛の巢狀組織網を固めつゝ、新に產聲を上げた晉北自治政府宣撫班を喜び迎へて所期の目的に邁進しつゝある。所期の目的とは何か、それは北支の民の豫言者となり、戰場の慈母となり、混亂の中に起つて正しい秩序の維持者となることである。此の目的の爲に彼等は種々の工作をなすのであるが、この工作は進擊する皇軍に從つて戰場を馳驅するものと、一定の土地に辨公處を構へて定着する

場合とがあり、前者を從軍宣撫班、後者を定着宣撫班といふ。

S青年宣撫官は二年有餘歲、この宣撫の爲に全支を奔走し、陽燒けした元氣な顏で左の如く語る。

從軍宣撫班は軍と形影相伴ひ、其の庇護の下に諸種の工作を爲すのであるが、情況の許す限り軍より一歩前進し、各村落の辻角と云はず軒下と云はず、ベタベタと貼り付けられた惡どい敵の宣傳ビラを片つ端から剝奪し、之に代ふるに日支親善、北支再建の明朗ビラを以てし、又白壁に深く刻み込まれた抗日スローガン等はスコップで掘り起して其の跡へ水をブツかけたりする——或時には、斯んな工作に夢中になつて居る間に軍に追ひ越されて了つて、氣がついた時には賴みの騎兵部隊は「跡の煙」ならぬ「跡の黃塵」を殘して姿が見えない。そこへパンパンと、一、二發見舞はれて、さては敗殘兵の包圍に陷つたかと覺悟のほぞを固めかけた時、後續部隊に拾はれて、傳令に早變りしたと云ふ笑へぬナンセンスもある。

之に較べると部隊が休止した時は、餘程氣分が樂である。「軍が休む時こそ、我等の働く時である」とは從軍宣撫班のモットーである。例へば大休止、即ち晝の休み時間には宣撫班は早い目に食事を濟ませ、村落工作に出かける。皇軍出帥の本義、共產黨、國民黨の惡業を說いて聞かせるのである。時には聽衆が餘り不潔で眼疾の多いのを見兼ねて、「皆もつと風呂を使はなくちや

いかん、風呂へ行くと長生するぞ」等言ふと、まるで高遠な長壽の秘訣でも敎へられたやうに感動する純朴な人達もある。講演者自身グツとレベルを落してかゝらねばならぬことは言ふ迄もない。蔣介石の名すら知らぬ者が居る。然し國民黨の名は充分知れ亘つて居るやうである。

レベルは落しても愛撫の眞心と熱意は、明日知らぬ戰場の眞中に立つ身は自ら昂まらざるを得ない。斯かる愛と熱とによつて、民衆が我が方の眞意を理解して吳れたと見るや直ちに其の中から苦力を求め出して、軍用道路、架橋、軍需物資の調達等に協力させる。勿論支那側のやうに强制的無賃勞役はさせない。時には道路を鋪修させつゝ前方の村落迄這入つて行つたところ、慌てふためいて逃げ出した敵兵が溫い飯と抽出し一つぱいの銅子兒（銅貨）を捨てて行つたので早速それを彼等にふるまつて喜ばせたと云ふ朗かな話もある。

果敢な我が軍によつて新しく一城が占領せられると其處に定着宣撫班が始まる譯である。

城內占領直後の工作は其の時の狀況によつて異るが大抵は人を集めること（住民の歸來勸告）から始めねばならぬ。河南省某縣城入城の際等は我が軍の進擊が急であつたのと、宣撫班が未だ敵の殿軍が退出し切らない間に城內に飛び込んで民衆を說き手に手に日の丸の旗を持たせたので勢ひ込んで入城した我が先頭部隊は、ニコニコした民衆の旗の波に迎へられ、初めの殺氣は何處

へやら、一町も行く頃には銃劍を外して美はしい日支交歡の情景が展開された譯であつたが、普通の場合は却々さうは行かない。

支那の爲政者は古來より狡猾な計策を立てるのが巧みであつた。秦の遠交近攻の策、近くは國民政府の一面抵抗一面外交の計等——然し、今次事變に於て彼等が徹底的に行つた「堅壁淸野之計」に至つては狡猾の上に惡辣である。つまり敗走する場合には一切の物資を掠奪又は燒却破毀して敵に一物も與へないと云ふ遺口である。此の憎むべき方策と巧みな恐日宣傳の爲に皇軍占領前後の城內外には生物と云へば猫の子一匹、物資と云へば靑葉一本さへも見當らないこともある。敵部隊がより優秀である場合、殊に此の傾向が强い。例へば河北省南部に濮陽縣と云ふ處があるが、こゝには若干乍らも國民政府の信任も厚く、此の地方七縣に亘る兵馬の權を握つて居た丁樹本と云ふ抗日縣長が居たが、彼が退却の跡へ雪崩れ込んだ皇軍將士は見渡す限り「野に一靑を止めず」と云ふ其の淸野振りに、腹立つ前に先づ呆氣にとられたさうである。

彼は現在匪化して丁樹本或は丁樹本部隊と呼ばれ今尙此の地方に蠢動して居る。

さて、斯かる無人の境に這入つた宣撫班は先づ適當な辨公處を見つける。銃や劍の影に民衆を怯えさせてはいけないと云ふ思ひやりから守備隊に餘り近くなく、且つ宣撫班の面目を傷つけな

いと云ふのが第一條件である。

次には避難民の歸來勸告であるが、普通の場合ならば如何に逃げて終つたとはいへ、尙小數の老弱者や下層民が殘つて居るから、それを芋蔓的に次から次へと歸來勸告をさせて行く手もあるが、濮陽縣のやうな場合にはさうはゆかない。此の地方へ入つた宣撫官の話によると、同班員は騎兵一箇小隊、步兵一箇小隊の掩護の下に、連日縣城外を隅なく求め步いた。そして纔に逃げ遲れた農民を發見するや、班員は直ちにドツシリと腰を下し、此の一人こそ與へられた最初の有緣の衆生であると云ふ意氣で諄々と宣撫を始めたのである。

「お前達は何故家へ歸らないのか」

「日本人に見つかれば屹度殺される」

「現に日本人はお前達を見つけても殺さないぢやないか、殺さないどころか、我々はお前達を幸福にしてやる爲に、お前達を搜し廻つて居るのだ、皆、自分の家に歸つて日本軍の庇護の下に明朗な濮陽を再建しようではないか」

腰を据え、肩を叩いての宣撫に無智文盲な縣民も安堵の色を示し、彼處から一人、此處から一人、鼠算式に誘ひ合ひ、懷しい我家へ足を踏み入れることになる。

斯くて數日の後、工作に疲れた班員は、歸り道で一塊りになつてガヤガヤ何かして居るのに出會つた。何事かと近寄つて見ると道普請をして居るのである。そして好意に滿ちた顏から「宣撫班の大人は毎日あちこち縣民の爲に御苦勞になるから、せめてお通りになる道の惡い處でも直して、御禮の印にしようとしてゐるのです」と純朴な物腰で話された時、班員一同は連夜に亘る疲勞も忘れて明日への輝かしい希望を感じたさうである。

歸來民が相當な數に達すれば、愈ゝ定着宣撫班が本腰になる。入場三日間に先づ理髮店と風呂屋を開業させて兵士の心持を柔らげ軍民融和を計つた氣の利いた若い宣撫官もあつた。日軍に對する認識が是正され、各人其の業に落着く頃になると、班は未歸來の良民にも溫い手を伸べて其の家屋財產の保護手段を講じ、また食なき難民には食を與へる、避難民收容所や施藥所、施米所、施粥所が設立される譯である。封邱（河南省北部）の施粥所等は守備隊の兵士達が「僅かですが食なき人に食を與へて下さい」と差出した醵金を基にして始めたもので、斯かる處から日支間の障壁が次第に崩されて行くのである。奪はれることのみ知つて與へられることを知らなかつた民衆が斯かる施設に如何に感激するかは言ふ迄もない。何も仕事のない子供等は隨分遠い處からやつて來ることもある。中には「私の村の子供八、九人は毎日宣撫班の施粥所でお世話になつて居

ますが、往復の道程が遠い上に、迚も寒さが酷いので遂に病氣になつて終ひました。だから施粥所の附近に二部屋程貸室をお世話下さい、其處で小孩兒達を寢起させるやう、取計らつて下さるまいか」等と隨分蟲のいゝ、だが考へやうによつては切實な願ひ文を辨公處に差し出した人達もある。河北省高陽縣での話である。

尙、一般的には宣撫班の此の難民救恤事業のみが特に取立てられて考へられ勝ちである。其の結果宣撫班は一種の變則的な慈善事業機關のやうに考へられる向もある。難民救恤は宣撫工作の一部門に過ぎないことを諒解されたい。

さて、戰禍の恐怖が漸く薄らぎ、曲りなりにも衣食住が滿たされる頃になると、そろそろ種々な物質的、精神的のいざこざが起き始める。こゝに於て宣撫班の問事處が開設される譯である。貸借問題から權利問題、警察問題もあれば時には警察官から增俸の斡旋を賴まれることもある。夫婦喧嘩の訴へ、娘の嫁入相談、「宣撫班の大人、是非私の娘を……」と云ふ申し込み等——持込まれる問題は豫想を許さぬ複雜さである。

然し、斯かる問題の主なるものは個人の問題としてよりも民衆全體の統一問題として取り上げられるべきである。こゝに於て治安維持會が結成される。會長には手腕よりも德望高き土着の故

老が選ばれる。また、縣には縣政府が創設される。斯くて宣撫班や各機關の援助により著々基礎を固めた治安維持會や、縣政府は軈て中華民國臨時政府の旗下に參じて華北の治安網を確立する。宣撫班は其の爲の光榮ある下準備を爲しつゝあるのである。

縣城附近の治安が恢復されると、宣撫班は力の及ぶ限り其の指導地域を擴げることに努める。其の節、第一に障碍になるものは、言ふ迄もなく土着の匪賊である。此の匪賊に對して宣撫班自身として爲すべき手段は、單身彼等の山寨に乘り込んで歸順を勸告するか、班で組織した自衛團を率ゐて、討伐するかの二つである。前者にあつては石家莊の宣撫班長が、附近の有力匪金億山軍を歸順させたの等、後者にあつては、河北省南部大名縣の班長が今春以來、子飼ひの自衛團四百名を率ゐて、近鄕匪賊を片つ端から叩き潰して廻つたの等が、最近に於ける痛快事とされてゐる。

勿論斯かる方面には犧牲も多く、近くは元氏宣撫班の王本學氏は歸順勸告に出た儘遂に兇惡なる匪手に仆れ、同行の森下宣撫官は今猶ほ行衛不明である。

斯くて宣撫班の指導圈が擴大されると、こゝに宣撫班として最も大きな仕事が課せられる、それは「鐵路愛護村」の結成である。高粱實る頃、匪賊の列車襲擊が始まる——等と云ふことは今

や昔の語り草となつた。今日、各沿線には鐵路愛護村が結成され鐵道沿線〇〇米以内には高粱のやうな高桿植物は殆ど影を沒し車窓よりの視野は廣く前後左右に開けてゐる。そればかりではない、「一人愛路萬人享福」のモットーの下に毎晩交替で鐵道附近を巡察し怪しい者があれば一里二里の夜道を厭はず宣撫班に急告する。斯く溫い愛護村に包まれて京山線初め華北の大動脈は今日迄略々支障無く軍事輸送の大任を果して來た。尙之等愛護村民は鐵路以外の一般的な匪賊情報を提出して軍、宣撫班の行動を容易ならしめてゐる。勿論斯かる仕事には犧牲を免れず、殊に元氏驛附近は華北共產ルートに當る關係上、屢々共匪の襲擊を受け數次に亘り善良なる村民が彼等の魔手に仆れてゐる。

以上、大體推移的に宣撫工作の概略を說明したが、如何なる時期に於ても時宜に應じて佈告、宣傳ポスター、ビラの貼布や經濟、產業方面の工作、さては日語學校の設立、新聞發行、青少年隊、婦女團の結成等敎育文化を蔑ろにすることは出來ない。殊に農業方面の指導は最も重點を置き來つたものであつて、最近此の方面に於ける今年度の總括的成果が「第一次農作物配給效果調査書」として本部農務係より各現地に報告されて居る。

斯くて四六時中、班員は殆ど床に就く時以外は休息する遑も無い、否狀況の如何によつては床

に就いてる間もゲートルを脫ぐことすら出來ないこともある。身をアンペラの上に橫へて靜かに目をつむるとき、

明日知らぬ生命を思へ唐國に心凝りつゝこの明け暮を

と云ふ歌も口吟まれるのである。それは單なる感傷ではない。朝に夕に彈丸の音を耳にし、そこを常住の住處として日を送る宣撫苦行よりかち得た一つの法悅の聲とも云ふべきであらう。

三、宣撫による結實

漢口の陷落によつて戰局は更に飛躍的進展を遂げた。即ち從來の武力戰に加ふるに更に建設戰が活潑に展開された。武力戰は敵軍を粉碎殲滅することを目的とするが、建設戰は支那民衆を把握し組織し之との一體的協力に於て東亞の新體制を確立强化するにある。宣撫班は實に建設戰の前衛隊であつて、其の對民衆工作が成功すると否とは直に今次聖戰の目的達成に影響する所至大である。支那民衆は實に勤勉で生活力の旺盛なる民衆である。而も過去幾千年、歷朝の變遷によつて兵亂を蒙り天災に痛めつけられ、軍閥に搾取され、近くは列强の侵略、赤露の共產思想とに蝕まれて歸趨に迷ひ、且つ重壓に喘いで居つたのであつた。然るに此の支那大衆も今や日本の絕

大なる犧牲によつて從來の障壁が取除かれ惠み豐かな太陽の下に起つ日が訪れようとして居る。今や友邦支那の土には皇軍の血潮が惜しみなく灑がれて居り、此の尊い土の上に新しい支那が生れなければならない、宣撫班員は實に此の認識の上に立つて凡ゆる民衆工作に從事して居るのであつた。宣撫班に課せられた任務は先づ我軍出動地域に於ける交通通信網を確保して用兵作戰の完璧を期し、特に戰鬪地域に在りては皇軍出動の本意義と其の威力を民衆に諒得せしめ、支那軍敗退の眞相を宣明して抗日共產思想の一掃から更に進んでは畏敬和親觀念の昂揚を計り以て更生國民建設の基礎を築き上げる爲凡ゆる手段と方法を講じて居る。其の具體的な實例は、

一　決潰された新黃河の修築

昭和十三年六月、蔣介石の軍隊が黃河堤防を破壞して自國の住民、數百萬人を洪水の慘苦の中に沈めたことは周知の事實であるが、敵軍は六月十日と十一日の兩日に亘り黃河の堤防中、中牟北方の三劉砦と鄭州東方の京水鎭の二箇所を決潰させ、周家口より正陽關十キロに及ぶ水害地を作つた。之に對し皇軍は時を移さず難民の救出、食糧の給與等に奮鬪、就中宣撫班の活動も目覺しいものがあつた、當時開封に配置されて居た宣撫班（班長町田）は、決潰された黃河の水が敵の穿つた戰車壕を傳つて東方に氾濫して來るのに對して皇軍工兵隊の援助を受け、

決潰箇所に近い村の村民約千人を動員して其の修築に着手前、時は七月中旬の暑熱の最も激しい時で附近にコレラは猖獗するし物資は無し、修築材料の蒐集はとても容易ではなかつた。然し其の間宣撫班員五名は村民と共に濁水の渦卷く中に胸の當り迄身體を沈めて土囊運び材木の運搬杭打ち等懸命の努力を一箇月餘り續け、漸く水害の慘苦から地方民衆を救ひ得た、其の間班員で健康を害する者續出し、殊に町田班長はマラリヤ熱に罹つたが、彼等が支那民衆を苦しみから救はうとする熱意は班員の病氣をも克服し、此の黃河修築の一部に成功したのである。村民の喜びと感謝は言ふ迄もなく、彼等中には宣撫班員の必死の働きに對して泣いて拜んで居た者もあつた。

二　水災區民の救濟

北支一帶は事變の起る前の六月中旬から四十四日間雨が降り續いた爲に黃河を始め永定河、沙河、子牙河等の河水が氾濫して津浦線、京漢線一帶は田畑民家が水に浸され、罹災民は三百萬人を超え其の上津浦線の沿線は敵が永定河並に大運河堤防を決潰した爲其の慘狀は倍加し獨流鎭、馬廠、滄州、東光當りは一面の海と化した。農民達は秋の收穫時期になつて收穫どころか船の往來して居る田畑を眺めて歎息するの外はなかつた。此の暴虐な水魔も本年の春になると

殆ど減水して元の田畑に歸つたが併し困つた事には春の種を蒔く時になつて種子が皆無、種子どころか農民は食べるに物がなくて草根木皮を食べて辛うじて餓を凌いで居る有樣であつた。之を放任すれば彼等は流民になるか匪賊になるかの外はない。依て軍宣撫班は此の農民達に食物と仕事を與へる爲に總量六千噸に達する粟、高粱、棉花等の種子を無償で與へた、其の價格は五十萬圓を超えて居るが、軍事中で貨車は足りないし敵兵襲擊はあるし、それ等の障害を排除しながらも係員は北支民衆の幸福の爲に不眠不休の活動をしたのである。其の結果幸せにも本年は二十年來の大豐作であつて靑空の下に黃色に實つた無心の果實が有心の農民に如何に映じたかは說明する迄もない。果せるかな最近に至つて北支の各省各縣の責任者及個人から感謝文が續々と宣撫班本部に到着し其の數が一千通を超え其の中に「堯舜の代とは斯かる恩惠を受ける時代の事でありませう」と皇軍の仁慈に感泣して居る者があつたが、更に河北省沙河縣胡家庄鄉長の許文及賈家庄鄉長の賈文元が連名で送つて來たのに斯ういふ禮狀があつた。「去年六月半から數十日に及ぶ大雨で各村は浸水、田畑は殆ど荒廢した上、二播種頃から戰局惡化の爲村民は避難し、家財を失ひ春の播種期を迎へても家には一握りの糧食もなく家畜は勿論蒔くべき種もなく眼の前に餓死を待つて居るのみでした。ところが思ひがけなくも日本軍が仁慈の

心を以て各農村に種子を配給して戴いたので秋の收穫の望みも出來何よりも眼前の餓死より免れることが出來ました、洵に感謝の言葉もなく、老幼男女は只々德に感じて合掌せぬ者はありません、秋になつて豐作の時は勿論種子はお返し致します、村民は今後晝夜を分たず死を以て鐵道を警戒し、せめて萬分の一の御報恩をしたいと固く決心して居ます。こゝに民衆を代表して謹んで感謝狀を呈します」。京漢線沿線の彰德附近ではこれ又本年春宣撫班が與へた粟の種子から一莖に二穗も稔つた大豐作なので農民は之を「嘉禾」の瑞祥と言つて歡喜して居る。

三　鐵道愛護村の擴充

以上の實績によつて北支の農村は皇軍の仁慈を肝に銘じ鐵道愛護にも彼等が積極的に協力するやうになつた。即ち彼等は鐵道を守備する爲に高粱殼を組立てて監視所を作り、各自交替で其の監視に當り、氾濫期には徹宵警戒し數十里の道を厭ひなく、匪賊の情報を持參する等、時には生命の犧牲さへ拂つてそれ等を敢行する。

鐵道は大陸の動脈であるので、鐵路を確保し其の沿線住民の生活を向上させることは、今後の新支那建設の根幹をなすものである。皇軍は實に全支那の鐵道中其の三分の二を占據してゐるが、其の沿線の住民は概ね吾等の眞意を諒解して昨今は彼等住民が進んで吾軍に協力するや

うになつた。軍はもとより新政府に於ても、又北支交通會社としても、鐵道沿線の治安確保を第一要件とし、其の基礎の上に産業及文化が建設されることとならう。

即ち具體的には沿線の住民と共に鐵道愛護村を組織し、鐵道の愛護警備に當るばかりでなく自衛團訓練を施して兵匪の侵入や襲擊を防止させるのであるが、此の組織は治安の確保された區域を根幹として順次僻遠の地に及ぼし、やがて奥地をも明朗化する方針なのである。

宣撫班の任務並に行動は、以上を以てしても盡きず、其の任務は實に廣汎多岐で、避難民を原地に歸るやう勸告し、皇軍の眞意を知らす座談會を開き、軍の布告、宣撫ポスター、ビラの配布をなし、或は民衆問事處を開いて、民衆の相談相手になり、病人には施療施藥を爲し、民衆の恐怖心を取り去り、親日の氣運を醸成さすことに努め、更に混亂せる治安を確保する爲に、皇軍占領地域の有力者、德望家を中心に治安維持會を組織、並に訓練を施して皇軍の警備不足を補ひ、併せて鄕土防衛の基礎を作らせてゐる。經濟産業方面は、金票及新紙幣の流通宣傳、農作物の收穫並に搬出の促進、市場の開設、物資の取引の斡旋をなし、又時には身に寸鐵も帶びず、單身敵地に乗り込んで、大部隊の歸順を勸告したりしてゐる。之等は死を決した上でなくては、容易に出來ることではない。文化方面では、閉鎖された學校を開かせ、日本語學校を起して自らも其の

教師に當つたり、軍と共に敵兵の包圍を受けて、城内の民と共に數箇月の籠城を續けなければならぬこともあり、或所では長期の籠城の揚句、糧食盡きて「愛馬喰ふに忍びず、未だ城内に若干の犬猫あり」と云ふやうな、部隊と共に行動し戰死者も出、且つ榮養不足から鳥目になつた者等もある。更に敵の襲擊を受けて名譽の戰死を遂げた者、匪賊の歸順工作に出かけて、未だ行方不明の者もあり、我が宣撫班から護國の人柱となつた者が、今日迄二十餘名に達し傷病者は百數十名に及んでゐる。その二、三を拾ふと

一　宣撫工作遂行の華と散つた勇士中、最初の犧牲者たる尾崎熊一宣撫官の勇敢なる戰鬪狀況を述ぶれば、當時尾崎宣撫官は保定の東北方高陽に於て宣撫工作に從事して居つたが、偶々本年一月宣撫班密偵よりの報告に依り、高陽縣南方約三里半の地點に共産匪千二百蟠居して居ることが判明したので、尾崎宣撫官は直に報告した結果、軍に於ても暴虐飽くなき共産匪の殲滅を期して、大討匪を敢行することになり、勿論尾崎宣撫官も張通譯を伴ひ勇躍之に參戰した。尾崎宣撫官は、絶えず軍の尖兵と共に勇敢に行動して匪情偵察、道案内等部隊行動に協力して前進又前進するや、突如前方に二、三百名の匪團を發見、軍は直に掃蕩を開始し難なく之を擊退して了つたが、此の銃聲に鳴りを鎭めて居た約一千名の匪賊は、一齊に砲列を敷きここに猛烈

なる戰鬪が展開された。尾崎宣撫官は戰鬪開始されるや、身は非戰鬪員であり乍ら重機關銃隊と共に第一線にあると、後方の有力な敵を猛射すべく、重機關銃を更に有利なる地形に移した る時、不幸彈藥手が負傷して重機彈藥の補充困難となるに至つたので、尾崎宣撫官は默過し難く、決然勇敢にも彈藥補充の大任を敵彈雨飛下に敢行した、第一回更に第二回を決行せんとした刹那、左大腿部に敵彈を受け、一旦地上に轉倒したが鮮血したたる身を奮ひ起し、更に行動を繼續中、又もや飛び來つた匪彈は憎くも同君の頭部を貫通し、遂に壯烈極まりなき戰死を遂げた。此の勇壯比なき戰死こそ、平和の戰士宣撫班最初の犧牲者であつた。

二　次に九月の八日山西省曲阜に起つた事件である。

同午前三時三十分、匪賊秦啓榮の部下約五十名が我宣撫班を襲擊した。彼等匪賊は最近宣撫班の活動を無視し、且つ宣撫班が武器を持たぬ爲に、特に宣撫班を襲ふ傾向があるが、當時宣撫班事務所は二室に分れて居り、一室には滿人宣撫官二名が就寢し、他の一室には日人宣撫官二名と、滿人宣撫官一名とが休んで居た。匪賊等は二室あることは知らず、日滿宣撫官の休んで居た部屋を目がけて突入、そこに居た葉山宣撫官外二名は直ちに飛び起き、戸外にて敵匪數名と格鬪になつた時、他の一室に居た滿人宣撫官の張寶中は物音に眼を覺して見ると其の有樣

なので直に銃を取り、身の危險も顧みず葉山宣撫官と格鬪中の匪賊に向け一、發を放ち一名を斃した。それによつて葉山宣撫官は危機を脱することが出來たが、匪賊は張宣撫官に反擊亂射を加へた爲に、彼は左腕に二發の敵彈を受け重傷、そして應戰中に夜が白んで、敵は後退したが、此の場合張宣撫官は敵の氣づかぬ自分の部屋にジツと潜んで居れば明に難を免かれ得たのであるが、日本人宣撫官の危急を見て自ら危地に飛び入り日本人宣撫官を助けたのである。此のことは日滿の兩國民が、完全に一體であることを身を以て示して居るのであつて、誠に其の勇氣と義烈な行爲は日本人を感動せしめた。

此の他、滿人の宣撫官で一身を挺して宣撫工作に從事し、遂に壯烈なる戰死を遂げた者や、支那民衆に神の如く慕はれ敬はれた數多くの美談を生んでゐる。宣撫班が過去二箇年餘に亘つて行つた業績を顧みるに、黄河の修築にしても、水災區民の救濟にしても、其の他宣撫官が身を挺した行爲は、要するに日本人の「眞心」、大御心を畏み奉つて御民吾等の盟邦に盡す「眞心」の現れである。この「眞心」が支那の民衆の胸に、一日一日と深く沁み込んで行きつつある。共產主義の思想及び其の信奉者は眞に太陽の揚る前の闇夜に彷徨する夜の魔物である。支那は今や日本の陽光を受けて新しい黎明の曉を告げようとして居る。

四、ある宣撫官の日記

共産軍の駐屯する所謂共産地區對策には宣撫班は特別な工作をなす。如何なる工作であるか。軍機に屬するので玆に說述する時期ではない。左に示すものは河北省宛平縣の某宣撫官の手記である。

ここは華北に於ける有名な共匪地區にして、既に一年前より優勢な第八路軍が蟠居し、附近住民を組織してゐたもので、我が〇〇隊が秋の一日この討伐戰を敢行せる際、從軍せる宣撫官の手記である。同地は山また山の棧道を辿り、人も馬も默して語らず、ゆくゆく山間に點在する小部落の宣撫は殊のほか至難なものであつた。

九月二十四日　土　晴

一、對象一般の狀勢　十字道、白道、小店の各村共婦女子は總て逃亡不在、馬匹も何れにか隱匿せるものゝ如し、然し前二回の從軍に際しては全村民逃亡不在なりしを思ふ時宣撫工作の效果今漸く顯はれたるものと思考す。

九月二十五日　日　曇

一、對象一般の情勢　前日と大差なきも夕刻少數の婦女子歸還せるものあり。

九月二十六日　月　晴

一、對象一般の情勢　庄戸、板橋村附近は耕地少く門濟鐵道不通以來石灰の採掘販賣不能となり住民の經濟狀況頗る不良なり、然も婦女子の逃亡、馬匹の隱匿せる等十字道附近村落の狀況に同じ。

九月二十七日　火　曇

一、對象一般の狀況　庄戸村に於ける宣撫工作の結果同村民より八路軍が嘗つて附近各村より蒐集せる銃器隱匿箇所を報告し來る、夕刻より一部婦女子の歸還するものあり。

二、行動並宿營地　庄戸村に宿營せり。

九月二十八日　水　曇

一、第八區地帶殊に軍向（軍上、軍下村を稱す）附近殘留民衆は日軍の入村に當りては國旗を揭揚湯茶の接待等して歡迎せるも其の擧動懷疑的にして猶ほ不安恐怖心あるものゝ如く婦女子は勿論逃亡中なり。

九月二十九日　木　晴

一、對象一般の狀況　前日に同じ、歸來するものなし。

九月三十日　金　晴

一、對象一般の狀況　軍向村に同じ、東齊堂は〇〇部隊宣撫班の入城により城內は我方の宣傳ポスター貼付又は宣傳文、漫畫の記入及び抹消し殘されたる八路軍の宣傳文等彼我宣傳展覽會場の觀あり。

十月一日　土　晴夕刻より雷雨

一、對象一般の狀勢　前日に同じ。村長及び村內有力者逃亡不在なり。

十月二日　日　晴

一、對象一般の狀勢　東齊堂に於ては歸來工作の效果なし、西齊堂は昨夕來歸來するもの頻にして〇〇隊の一部駐屯せるを以て同隊の軍紀嚴正なるに感銘信賴せるによるものなるべし、下清水村は婦女子の逃亡不在なる事各村に同じ。

十月三日　月　晴

一、對象一般の狀況　各村共婦女子の逃亡及び日丸國旗の揭揚皇軍を迎ふる事各地に同じ。

十月四日　火　晴

一、對象一般の狀況　前日に同じ。

十月五日　水　曇

一、對象一般の狀況　鎭邊城は常峪村に同じ。
橫嶺村は我軍匪賊威嚇射擊に戰慄せるものゝ如く全村民逃亡不在なり。

十月六日　木　晴、時々曇

一、對象一般の狀況　前各地に同じ。

十月七日　金　曇夜時々小雨

一、對象一般の狀況　前各地に同じ。

十月八日　土　雨

一、對象一般の狀況　王手村附近村落に於ては民心全く安定し、皇軍の入村に當りては七、八區に見る事能ざりし少年兒童群の各所に遊ぶを見たる程なり。

十月九日　日　曇

一、對象一般の狀況　前日に同じ。

其他　今次從軍に當り宛平縣七、八區及び昌平縣の一部にまで足跡を印し宣撫工作の結果我に對する信頼、新興支那への憬憧を深め得たりと雖も該地區は八路軍の勢力範圍なれば第九區地帶を完全に宣撫確保し七、八區民衆の羨望の的たらしむると共に該地區民衆並に八路軍兵士に對し積極的宣傳工作をなすの必要あり。以上

五、碧血にじむ苦闘の數々

死して後已む

山西の大動脈、同浦線上より驅逐され大行、連枝の嶮峻に竄入し今は全く土匪化した第八路軍敗殘兵に最後の止めを刺すべく、少數の〇〇部隊は二名の宣撫官を加へ、四月八日の拂曉屯留縣（山西東南部）出發、それより沁縣、武鄉縣、楡社縣を重疊する大行山脈の谿間を縫つて各地に出沒する匪團を追擊しつつ、日に十數里の難行軍を續けた。其の間、木島宣撫官は王宣撫官を從へ隊に即かず離れずの姿で、常に尖兵より一歩前進、各村落の辻角と言はず、軒下と言はずべたべたと貼付けられた惡どい共產主義宣傳ビラを片つ端から剝奪、それに代ふるに日支親善、再建北支の明朗ビラを以つてし、壁上に深く刻み込まれた赤色スローガンを發見すると直ちにスコツ

プで掘起し、其の跡に水ぶブツ掛ける等、四月とは言へ眞夏に變らぬ炎天の下に冬服着用の儘、逞ましい宣撫苦行を續けていつた。しかも部隊が豫定の進軍を了へて宿營地を定める頃には、宣撫官には更に又第二段の工作が待ち構へてゐた。軍が休む時こそ我等の動く時であることは我等從軍宣撫班のモットーである。明日の進軍に備へるため薄闇の中を駈け廻つて軍用道路、鋪修工夫の募集、衛生隊と人夫募集、附近村落の匪狀蒐集にと奔走せねばならなかつた。かくて、やうやく一日の公務を了へ宿舍に歸り着いてからも舍營兵の通譯をして八方斡旋し、ごろ寢する迄は四六時中、走り續けの狀態であつた。晝食後の休止も宣撫班にとつては、大切な活動時間である。木島宣撫官は毎日、日課の如く、王宣撫官を後方の部隊本部に連絡せしめ唯一人部落の中へ這入り込み、民衆を集めて皇軍聖戰の主旨、思想戰に對する覺悟を鼓吹しては一人でも多くの親日分子獲得に精根の限りを盡した。

かくて從軍九日目の四月十六日午後五時地上に長い影を曳いて武鄉の東方六粁の地點（同浦線平遙東方七十粁）に差しかゝつた際豫て數次の抵抗を繰返し敗走しつゝあつた共匪は、有利な山頂を利用して峽谷を行進して來た尖兵目がけ待ち受けたチェッコ機關銃をこゝぞとばかり擊ち續て來た。スワとばかりに我方は散開し、地物を楯に彼我の交戰は這ひ迫る薄闇の中に銃聲を木靈

させ乍ら火花を散らすに至つた。六時過に至り早くも我輕機の正確さに浮足立つた敵匪の中、樹陰を利用して尙も頑强に抵抗してゐた二、三の敵匪は思想戰の戰士、宣撫官の接近し來るを目擊するや一齊に銃を之に向けた「おい宣撫官狙はれてゐるぞ腕章をはづさんか」と部隊長の聲に王宣撫官がはつと前方に目をやつた刹那、續け樣に飛來した彈丸の一つは木島宣撫官の左足膝關節に貫通銃創を與へた。しかし兵員の少い時とて直ちに木島宣撫官を介抱する暇も無い。木島宣撫官は自ら氣を引立て、ここを最後の御奉公と覺悟のホゾを堅め、腹這ひ乍ら射手に渡す爲め數次輕機と彈藥の間を往復したが遂に氣力盡きて其の場に昏睡狀態に陷つた。戰鬪後直ちに〇〇野戰病院に運ばれ王宣撫官看護の甲斐あつて再び意識を恢復し、一時小康を得た樣であつたが、それは同宣撫官の根强い精神力が迫り來る死への最後の抵抗であつた。連日にわたる極度の疲勞と多量の出血は遂に再起せしめず數日の後護國の鬼と化した。

時に歳僅かに二十三歳。

京漢線新樂場内及其の驛に約二千名の共產匪が來襲したとき城内にある宣撫班事務所を目がけて南北城壁より梯子をかけ城内に亂入した二、三百名中五、六十名の一團は宣撫班事務所の左右

及裏手の屋根より雪崩をうつて殺到して來た。小宮山宣撫官は勇敢にも室内にあつて單身小銃、短銃を持つて之に應戰し身に數彈を受けたが屈せず防戰した爲敵は一名も事務所内に入ることが出來なかつた。小宮山宣撫官は尙萬一自分が敵彈に斃れ重要書類が敵の手中に入るやうなことがあつては申し譯がないとの責任感から隻手敵と渡り合ひ乍ら重要書類を整理し、之に室内にあつた石油を注いで火を放ち、全く灰燼に歸するのを見屆けてから從容として室の一隅に坐し吾れと我が頭部を擊ち拔いて自決した。之と同時に敵は室内に亂入し目星しきものを奪つて逃走したのである。

立山宣撫官が民國二十五年の旱魃、二十六、七年に亘る水災により極度の貧窮に陷つた山東省臨淸縣の宣撫班長として吉林鐵道局から赴任して以來、貧民の救濟に治安の恢復に晝は脛を沒する泥濘の中を東奔西走、夜は匪賊の襲擊と戰ひ乍ら、漸く耕作の目鼻もついたので一先づ諸報告を兼ね宣撫工作上の連絡を爲すべく順德に向つて出發した。幸ひ〇〇部隊のトラックに便乘を許され、砂塵煙る惡道路を疾走すること數時間、正午過ぎ漸く平鄕縣城に着いたので、數名の將士と共に一軒の小屋に入り持參の辨當を開いて食事を終へ休憩中、突然シュッと云ふ音を立てて飛

んで來た一彈は目前に命中してパッと土埃を立て其の土塊が土間に飛散した。敵か味方かと訝る
暫もなく何時の間に何處からやつて來たか多數の敗殘兵が見る見る四方の屋根に姿を現はし機銃
さへ据ゑ附けて立山宣撫官の居る家屋目がけて亂射を浴びせかけた。將兵は非戰鬪員の立山宣撫
官を庇はうとしたが、自ら率先して唯一挺の拳銃を振りかざして屋外に躍り出で、矢庭に一人を
地に擊ち倒し其の屍を乘り越え、街路に脱出しようとしたが、塀影から狙擊した彈の一彈は不運
にも立山宣撫官の腹部に命中、其の場にドッと倒れて昏睡狀態に陷らんとした。然し勇敢なる同
宣撫官は再び立つて敵の群る屋上に飛び上り擊つて擊つて擊ちまくり、血路を開き屋根を傳つて
隣接部隊に到りトラックに移された。後刻命旦夕に迫つたのを自覺するや、微かに頭を擡げ東方
を遙拜し口邊に笑を湛へた儘瞑目したのであつた。

皇軍が長驅して河北省南部の大名縣城に進擊した時のことである。治安恢復後良民が嬉々とし
て皇軍の庇護に安んじ、家業に專心する有樣を見た同地方で有力な李匪首は一旦歸順したが、間
もなく匪賊稼業に轉向し始め遂には大擧して大名縣を侵さんとする形成が見えた。其處で宣撫工
作に從事して居た第〇〇宣撫班は一度歸順した匪首であるから其の蒙を啓き、天下の大勢を見る

明さを與へるなら再び歸順するであらうとの確信の下に、今村班長以下一同は唯一の武器である
「誠意」を以て之を宣撫歸順せしめることとなり西付集村の李匪の山寨に出かけたのであつた。
そして敵の步哨線を通過しようとしたとき、敵は一齊に猛射を浴せかけたので流石宣撫官も已む
なく一時掩護物に身を潛めた。其處で必死となりハンカチを打振り李匪首に面會に來たものであ
ることを叫んだ。此の兇惡なる匪賊の步哨にも宣撫官の熱誠が通じたか、彼等は軈て銃を收め近
づいて來た。先づ其の手始めとして諄々として此の步哨を說き七名の匪賊に銃を擬せられ乍ら李
匪首に面會した、今村班長は持參して來た煙草、鹽等を李に贈つて陣中慰問を爲してから時代の
推移、皇軍の威力、皇軍出師の眞意を說明し、再び我に歸順することを說いた。斯くて交涉を重
ねること數回で李匪首を說得歸順せしめることが出來たのであつた。

豪膽大森宣撫官

敵軍四十萬

世界戰史上未曾有と稱せられた徐州大包圍戰は世界注視の內に五月十八日を期して戰鬪開始を
聞くやアッと言ふ間に南北より挾擊、僅かに數日を以つて彼に殲滅的打擊を與へ、最負筋の英佛

は勿論、當の日本人をさへ其の神速振りに驚倒せしめた。驚いたのは一般國民だけでは無い「徐州陷落何時でもござれ」と隴海線用の宣傳ビラに佈告文に萬端の用意を調へ、手ぐすね引いて待ち構へていた宣撫本部すら、徐州陷落の通電を前にして、時ならぬ慌しさに喜びの大多忙を極めざるを得なかつた。しかし羅馬の成るは一日にして成つたのではない。

表面華やかに見える此の大勝利の裏には皇軍全體の數ヶ月に亘る血のにじむ様な苦難苦行が續けられてゐるのだ。一見徐州陷落と直接的の關係の無い様に考へられる宣撫班にとつても、この期間は一種の受難時代であつた。山東某縣の宣撫班は、日につぐ徐州進軍通過部隊の宿舍、兵糧の斡旋に歡送迎に、連日の徹夜が祟り遂に惡癘に冒されて班員の大部分が發熱して了つた。發熱し乍ら奮闘を續けたのである。

そればかりで無い「日本軍は皆、徐州に進軍して今や當縣城には數名を殘すのみである。共産軍は此の手薄に乘じ。〇月〇日を期して縣城一帶を奪取する豫定である」といふ誠しやかなデマが如何に多くの良民を惑はし、我等の治安工作を妨害し、經濟組織を擾亂し、親日縣長を嫌がらせた事か。それらの逆宣傳が大きかつた丈に、徐州の捷報は反動的に意想外の效果を示し、五月十九日、從軍宣撫班徐州工作開始の快ニュースと共に明朗北支の建設に躍進的な段階を作つた今

日にあつては寧ろ快よい思ひ出とさへなつたが「忍辱」の當時を思へば「忍辱」をこそ常住のモットーとする我等も今更乍ら沁々とした氣にならざるを得ない。次に述べんとする處は、大勝利直後の挿話であるが、これも又徐州會戰が投じた波紋の一つであつた。

卽墨駐屯軍一部の移動を知つた山東共産匪は、小癪にもこの際に乘じて卽墨の奪回を企ててゐたが小數精鋭の皇軍に睨まれて手も足も出ず、遂に其の期を逸して了つた。徐州陷落の報は彼等に言ひ知れぬ焦心を與へ、焦心はやがて自暴自棄と化した。ヤケになつた彼等の尖鋭分子は二十三日午前九時三十分最も手薄な城門より便衣に身をやつして城内に侵入した。卑屈な彼等が先づ目指すは銃劍なき戰士にして思想戰の仇、宣撫官の辨公處内には大森久治宣撫官が獨り悠々と縣知事及近郷各村長指導に關する腹案を立ててゐた。「宣撫官辨事處は事情の許す限り守備隊より遠距離の地點に設ける事、銃劍の影に民衆を怯えさせてはならない」と言ふ大森氏の信念が、この場合彼等の乘ずる處となつた。さていち早く辨公處に潛入した八名は大森氏に騷がれる事を恐れてかひそかに後方に迫つて突如其の腕章と宣撫官徽章とを强要した。宣撫官の首には三千圓、腕章と徽章一揃への代金が二千金、これが彼等の賭金である。〃生命は惜し金は欲し〃。の二筋道が一千圓の差額を我慢してこの擧に出でしめたのである。

腕章がどんな風に利用されるかを知つて大森氏は之に對し底力ある無言を以つて對へた。見えぬ影に怯えた該匪は、手答へのない氏の態度にいらだたしさを感じつゝ多勢を頼んで、この二つをもぎ取らうとかゝつた。素知らぬ顏で隙を伺つていた同氏は徽章に手が觸れんとした刹那、一喝一聲、やにはに拳銃を放つて敵の左大腿部に一發を喰はせた。弱敵と見て侮り切つてゐた紅匪はこの一擊に頗る狼狽、一人は戸外に遁れ様に氏の頭部を狙つて拳銃を發した。

ハツと頭部に大衝動を感ずるや、同氏は益ゝ奮ひたち、最後に逃れんとする敵匪の後頭部を鐵製の水筒で亂打しその場に昏倒するのを見屆け、こゝで始めて激しい苦痛を感じたが、尙も怯まず沈着にも事務所内を整理し、すべての重要機密書類を燒却してから急を青島に告ぐべく（同氏は健氣にも實際に青島まで行かんと意圖したのである）屋外に飛び出し街上に散在する匪團の亂射を浴び乍ら——兼てかゝる時の用意にもと目星をつけて置いた城壁の破壞個所へ驀地に疾走、足場を求めて丈餘の城壁を攀登り、それより勇を鼓し匐ふ様にして縣道を南下したが、折柄卽墨に急行せんとして北上中の友軍部隊に邂逅、狀況報告を終へたまゝ其の場に昏倒した。

石家莊の礎

「四月二十一日を以て我方に歸順せる金億山軍は其の後の功績顯著なるものあり、遂に認められて七月十四日、新政府治安部に編入、皇協軍石家莊第一師第一支隊と命名せらる」

此の一本の電報の陰に隱されてゐる幾多宣撫官の血の慘むやうな努力を讀者は想像し得られるであらうか。金億山はもと京漢線石家莊附近に大勢力をもつ匪賊の領袖であつた。其の彼を歸順せしめ說得し進んで皇軍の別働隊として活躍せしめ、遂に新政府の正規軍に編入させる迄の數ヶ月、直接其の衝に當つた宣撫官の苦心は並大抵ではなかつた。幾多の努力玆に目出度く實を結び班長以下宣撫官の滿足想ふべし。曾て俵班長は次の如く當時の狀況を述べた。

「金億山の問題も遂に治安部編入が內定する處まで漕ぎつけました。單身山寨に乘込んで說得、やつと歸順させて見ると一番困つたのはやはり給與の問題でした。金億山も隨分切りつめてやつてゐた様でしたが、何分にも旗本千五百、順德方面の外様を合せると一萬を超えるのですから並大抵ではありません。金億山の功績は認め、現在少々の犧牲を拂つても彼を援助してやる事が結局將來の爲に有意義だと思へばこそ各關係當局との折衝に奔走もし、これを養つてもらふ様にしましたが、若しもの事があつては——と中々複雜な問題となつて來るのです、——それでも、自分としてはどうかしてやらねばならない、何か多忙の爲めうつかり其の方面を疎にすると直ぐ心

ない部下の略奪が始まるのです。さうなると其の尻は直ぐ自分に廻つて「俵さん、約束が違ふ、皇協單が略奪するとは……あんなものにもう一日も宿舍は貸せません」と村長がえらい劍幕でネジ込んで來る。僕の方へ來るのはまだよい方なんです。まかりまちがふと掠奪匪賊として計伐される。かうなると又其の尻が自分に來ます。此度は金億山爺さんが血相變へて飛んで來る。「俵さん約束が違ふ、私の可愛い部下を狙擊して呉れるとは重大な問題です、これや考へなくちやならん」と言ふ譯です、彼等はさう言ふ方面には中々義理堅い處があるんです。まあざツとこんな調子でした。小鳥の中には一日餌をやらぬと駄目になつて了ふ奴があるが金億山軍も丁度それみたいなこともあつたのです。しかしもう大丈夫です。臨時政府の下に入れば、「親方、日の丸」と云ふ譯です。第一金億山の張り切り方が違ふ、石家莊附近の匪賊は自分が一人で引受けたと言つてゐます。この方面では試驗濟みの彼等です。三、四百の少數で機關銃を有する敗殘兵千五百を蹴散らした獲鹿縣任村の激戰などは督戰してゐる自分が反つて引づられた形でしたよ。之からは後方治安を彼に一任、一意專心縣城内の明朗工作に拍車をかける積りです」班長は更に語を繼いで石家莊附近に於ける宣撫工作の情況を次の如く語つた。

「何といつても石家莊の樣な大都市では知識層に呼び掛ける事が第一です。既に青年層、少年層

の叩き直しには手をつけてゐます。青年宣撫會（四千名）女子宣撫會（三百名）の組織も了へ堅實潑剌たる一種新鮮の空氣が市内に漲つてゐますよ。前者は人夫、物資、軍馬の調達等、大いに皇軍の側面援助をやらせてゐます。唯今は是等の中から更に優秀な者をえり拔いて青年宣撫隊、女子宣撫隊、少年宣撫隊を結成中です。三ケ月の訓練所生活に黨共の惡夢をサラリと洗ひ流して九月から中堅層の指導にグン〳〵乘出せます。思想戰の新撰組です。さうなると僕は差當り近藤勇と云ふ役割になりますかなハハハハ……少年宣撫隊には特に新時代の農本主義の教育を施してゐますが、僕の班ではS君が此の方面の擔當で宣撫班獨自の立場から近縣の農業狀況を調査して呉れてゐます。それによると打續く凶作、戰禍に拘はらず、流石に未だ支那獨特の融通性を失つてゐない樣ですから、農村自力更生の方針に基き共同工作や何やを指導して見ました處、可成效果を收めて今秋の收穫は先づ樂觀的です。かうした根本的な救濟策と併行して施米や施粥を隨時行つてゐます。

僕の方には女子宣撫隊がその方面を擔當してゐます。話の序に一言添へますが日本人の宣撫も必要ではなからうかと思はれるのが有りますよ。戰禍の跡へ飛び込んで何かボロ儲けは無いかと血眼になつてカキ廻された日には、宣撫班の千の宣傳もペチヤンコですからね。この方面は尤も

在留邦人の認識も日に高まりつゝありますが、何時だつたか人力車衝突の傍杖を食つて路傍に轉倒した子供を日本の兵隊さんが抱き起して、わざ〳〵家まで連れ屆けてやつた處、母親が非常に感激して子供同伴で宣撫班までお禮に來て呉れましたよ。キヤラメルを與へて歸してやつたら、とても、イソ〳〵して出て行きました。少くとも今日は二人の同志を得たと思つて、一日愉快でした。

こんな例はチヨイ〳〵あります。處が宣撫班員が同じ樣な事をやつても、決して禮には參りません、宣撫班はそんな風にして呉れるのが當り前だと思つてゐるからですハハヽヽヽ」俵班長はこゝろよげに笑つた。

昭和十四年六月二十九日　印刷
昭和十四年七月　二　日　發行

支那共産軍の現勢

定價貳圓

著者　深田悠藏
發行者　山本三生　東京市芝區新橋七丁目十二番地
印刷者　青野仙吉　東京市芝區田村町四丁目二番地
印刷所　青野印刷所　京東市芝區新橋七丁目十二番地
發行所　改造社　振替口座東京八四〇二番　電話芝(43)自一一一一番至一一二四番

（兩角製本）

法制局藏書
32.7.26
調查立法局

昭和十四年十二月
[illegible]